



ゼミ生たちが訪れた 高島のローカルスポット

9/21-23に行われたフィールドワークをはじめ、何度も高島を訪れたゼミ生たち。
活動のなかで出会ったお店や営みの場を紹介します。



高島市について
琵琶湖の西に位置する滋賀県高島市。マキノ町、今津町、新旭町、安曇川町、高島町、朽木村の6地区からなり、46,000人ほどが暮らしています。京都からはJR湖西線で約45分の距離にあります。

新旭

TAKASHIMA BASE

新旭駅から徒歩1分。築50年の空き家を改修して、2023年2月から動きはじめた場です。「BASE DAY」「たかしまサーカス」「未来のジャム」「たかしまデザイン会議」を通じて、なにかをはじめ、だれかとつながり、なにかが起こったり、なにかが見つかる場所です。



〒520-1501 滋賀県高島市新旭町旭 870-7

新旭駅前ふれあい食堂

新旭駅西ショッピングセンター「エスパ」で第4日曜日にはひらかれます。おいしいカレーを100円で味わえるこの食堂には、中高生から親子連れ、高齢者までいろいろな人が集まります。「地域福祉へのはじめの一歩」ともいえるゆるやかなつながりが生まれています。



〒520-1501 滋賀県高島市新旭町旭 1-8-5

近江高島

シェアキッチン 白湖

鮎寿し、おむすび、焼き菓子、ケーキ、卵料理、水餃子、ジビエ...日によって店主が変わるシェアキッチンです。オーナーは、「大溝の水辺景観まちづくり協議会」のスタッフでもある上田未来さん。料理はもちろんのこと、空間設計や交わされる会話からも、高島の「今」を受け取れます。



〒520-1121 滋賀県高島市勝野 1229

katsuno coffee stand

おいしいコーヒーが飲みたいなあ、というときにぜひ立ち寄りたい土日営業のコーヒースタンド。店主は、平日は大阪で働く中村さん。実家の美容室「おしゃれサロンかつ乃」に併設されています。大学在学中から準備を進め、2023年12月にオープンしました。毎日営業してほしい！



〒520-1121 滋賀県高島市勝野 1377-1

近江今津

ラナのSPICEBOX

週末限定のテイクアウト専門カレー屋さん。ご夫婦で営まれています。インド出身のラナさんは、東京で料理をされていたそう。妻の有希子さんは、平日は福祉の仕事をしているそう！琵琶湖のほとりで食べた最高だろうな。地元で大人気！予約をおすすめします。



〒520-1611 滋賀県高島市今津町弘川 637-1

近江手造り和ろうそく 大興

主に石油由来のパラフィンを使う「洋ろうそく」と違い、燻（はぜ）をはじめとする植物素材から和ろうそくを手づくりしています。創業は1914年。4代目の大西巧さんが持続可能な原材料である米ぬかから開発したお米のろうそくは、2011年にグッドデザイン賞を受賞しました。



〒520-1623 滋賀県高島市今津町住吉 2-5-8

料理旅館 丸茂

この旅館があるから、安心してフィールドワークに出て行ける。合宿中は、ゼミ生たちのベースキャンプとなる旅館です。自家製のボン酢やごま豆腐をはじめ、ごはんのおいしいこと。ちなみにオーナーはガンダム愛好家！館内に入ると、ガンブラが出迎えてくれます。



〒520-1623 滋賀県高島市今津町住吉 2-2-4

安曇川

鳥中 安曇川本店

あっさりとした鶏肉に、こってりとした赤味噌ベースのタレをまぶした「高島とんちゃん」。滋賀県高島市のご当地グルメです。こちらが発祥のお店で、創業は1961年。夕飯ときともなると、ひっきりなしにお客さんが訪れます。フィールドワーク中のBBQでも大人気でした！



〒520-1212 滋賀県高島市安曇川町西万木 9-2

たかしまデザイン会議

高島で暮らし働く人たちが集い、語り合い、高島らしさを生かした、まちの未来を描くプロジェクトです。2024年度は全5回開催となりました。ゲストに高橋信夫さん(社会福祉家)、田中悠介さん(デザイナー)、小松理度さん(地域活動家)、影山裕樹さん(編集者)、西本千尋さん(まちづくり活動家)、守本陽一さん(総合診療医)を招きました。



【ふくしデザインゼミ LOCAL - TAKASHIMA 2024】

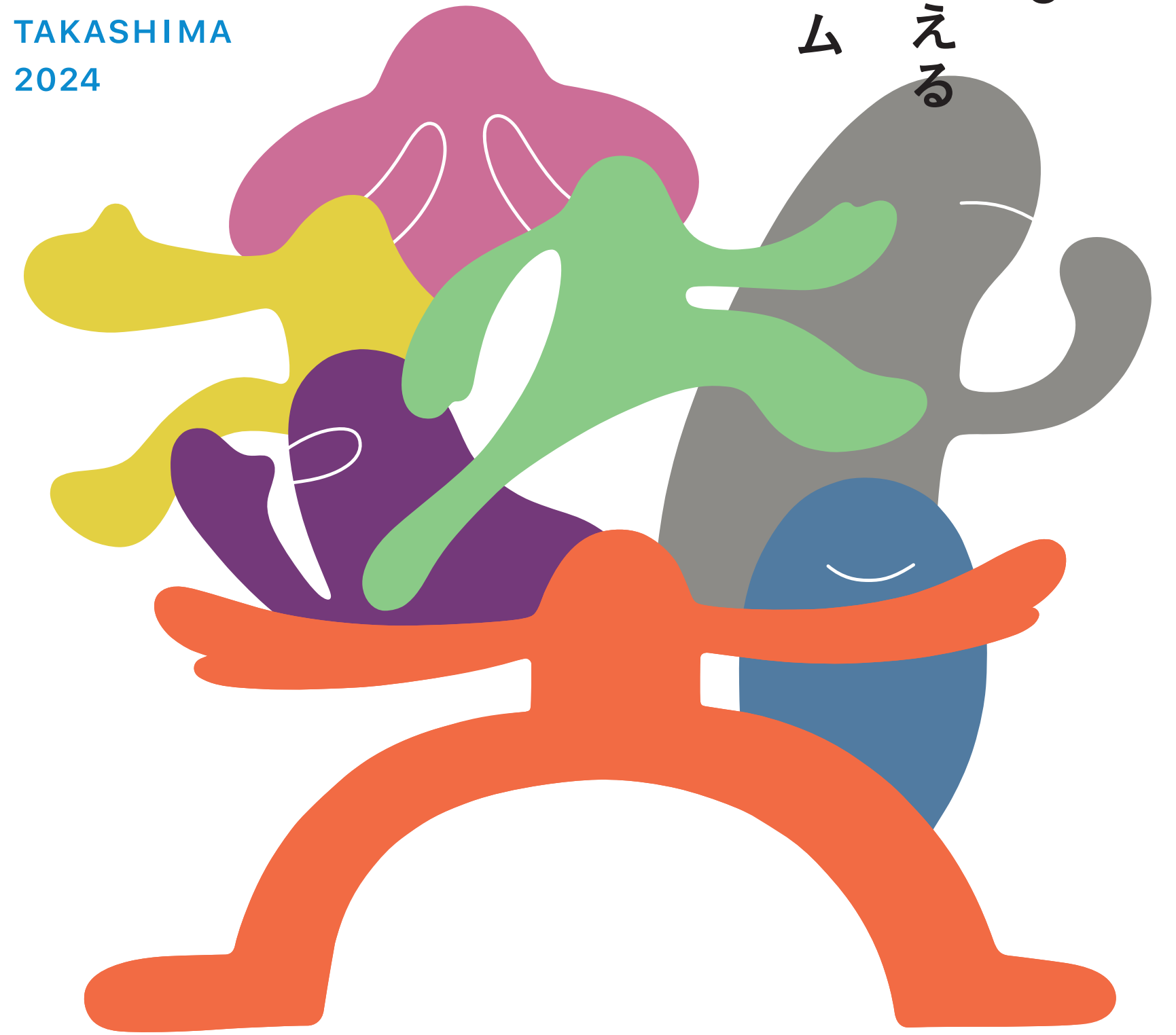
2025年3月20日発行 発行者：今津新之助(一般社団法人ぼくみん) 発行元：一般社団法人ぼくみん 〒600-8191 京都府京都市下京区五条高倉角堺町21シムキノウエダビル501 info@bokumin.jp
アートディレクション・デザイン：田中悠介 (designと) イラスト：安澤優那 (designと) 編集・撮影：大越はじめ、奥田峻史 (toi編集会) 印刷：株式会社シーズクリエイト 助成：日本財団

Supported by THE NIPPON FOUNDATION



TAKASHIMA 2024

ローカルで
ふくしを学び
デザインを考える
実践プログラム



校舎やオフィスを飛び出そう！ 地域を教室に、手と心を動かし学ぶプログラム。

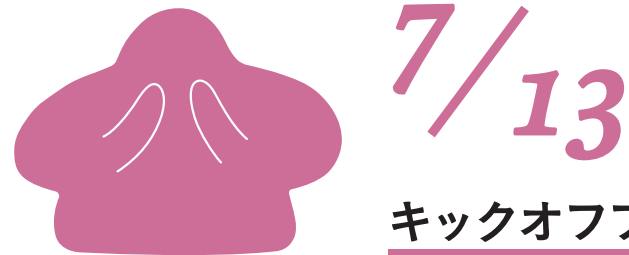
目の前の人と出会い、話し、読み、食べ、心を揺らし、手を動かしながら、ゆるやかにまちの未来に関わっていく「ふくしデザインゼミLOCAL-TAKASHIMA 2024」。滋賀県高島市という地域を「教室」に見立て、3ヶ月間にわたり活動する実践的な学びのプログラムです。テーマは「まちをゆたかにするアイデアをカタチにする」。ゼミ生は、29歳以下の学生・社会人です。21人が「棕川」「TAKASHIMA BASE」「ゆたか会」「広域」の4つのフィールドに分かれて、高島を駆けまわります。

プログラム概要

日程：2024年7月13日(土)～11月30日(土)
開催エリア：京都府京都市・滋賀県高島市
参加人数：21名(29歳以下の学生・社会人)
講師：田中悠介、影山裕樹、川中大輔
主催：一般社団法人ぼくみん、designと
共催：社会福祉法人ゆたか会、TAKASHIMA BASE
協力：株式会社Beスマイル
社会福祉法人武蔵野会 ふくしデザインセンター設立準備会
後援：高島市社会福祉協議会
助成：日本財団

3ヶ月にわたる なまみの学びのプログラム

7月にはイベントにあたる「キックオフフォーラム」を開催。参加を決めたゼミ生21人は、8月のキックオフ集合ゼミ、9月の高島市でのフィールドワークを経て11月の公開プレゼンへ。それぞれの学校と職場を飛び出し、地域の人となまみで学び合う3ヶ月間を紹介します。



7/13 キックオフフォーラム @ KYOCA京果会館 3階「nacoba」(京都市)



会場には、関西圏を中心に、東京からも約70人の学生と社会人が集まりました。専攻や職業もさまざまです。第1部では社会福祉法人武蔵野会の理事長である高橋信夫さん、「designと」の田中悠介さん、福島県いわき市をフィールドに活動する小松理度(りけん)さんがクロストーク。第2部では、ふくしデザインゼミLOCALを体感！高島をテーマに、小松理度流の「まちをおもしろがる」アイデアを考えてみるワークショップを開催しました。

デザインの視点

田中悠介 デザイナー/designと代表

1 分野や役割を越境する

「いいデザインって、クライアントさんと一緒に悩んで、それぞれが自分の領域を越えて重なるところに生まれることが多いんです」

2 ミクロとマクロの視点を行き来する

「目の前の人に向き合うことと、全体を俯瞰して見ること。2つの視点を意識的に切り替えてみましょう」

3 余白をつくる

「余白があることで、人それぞれの受け取り方が生まれ、デザインに強度を生み出します」

クロストーク「高島のゆたかさって？」

八坂和美さん × 西村武博さん
高島市社会福祉協議会 株式会社Beスマイル 代表

「スタバがない、ファミレスがない。買いたいもの目線だと、高島にはないものが目立ちます。だけど、暮らしに入り込むとほんとうに楽しいまち！時雨になるとほんとうに美しい虹があらわれます。まちの未来を考えようと、法人の枠を越えて連携していく人たちがいます。ふくしデザインゼミLOCALは「すごく楽しみ！」と笑顔の八坂さん。高島には余白のゆたかさがあると西村さん。「今までの正解が通用しなくなるなかで、10代20代のみんなと一緒にやっていきたい。『こういう道もあるのでは？』と横並びで話しながら、共感しながら、手伝い合いながら」



デザインワーク 「わたしをデザインしてみる」

プログラムのキービジュアルであるモンスターのようキャラクターの、自分バージョンを考えるワーク。フィールドワークに向け、頭だけでなく手を動かしてアイデアを考える練習になりました。



講師紹介



田中 悠介 デザイナー/designと代表
1985年大阪生まれ。大学院まで建築を学ぶも、建物を建てるだけでなく、あらゆる領域の課題に対してニュートラルな視点を持って解決できるようになりたいと思い、デザイナーになることを決意。数社のデザイン事務所を経て、2016年に「designと」を設立。デザイン分野にとらわれず、さまざまな領域の課題に取り組む。



影山 裕樹 編集者/千十一編集室 代表
1982年、東京都生まれ。早稲田大学第二文学部卒業後、出版勤務を経て独立。著者に「ローカルメディアのつりかた」(学芸出版社)、共著者に「新世代エディターズファイル」(BNN)など。WEBマガジンEDIT LOCAL、ワークショップLOCAL MEME projectsなどを運営。大正大学表現学部専任講師。



川中 大輔 ファシリテーター/龍谷大学社会学部 准教授
1980年神戸市生まれ。2003年にシチズンシップ共育企画を設立。「市民としての意識と行動力」が育まれたり発揮されたりする場づくりに取り組み、全国各地で市民教育や若者の参加、協働まちづくりやNPOマネジメントに関するワークショップを担当する。市民の社会参加や社会イノベーション実践に資する教育/研究に取り組んでいる。

TOPICS



前年度の学びに触れる

講師の田中悠介さんからは、前年度に実施されたふくしデザインゼミ2023-2024の事例を紹介。高島ゼミの参加者たちは、「ふくしをひらくレシビ」を考案。自分たちで文章を考え、紙面のデザインまで手がけました。そして最終発表では、印刷したレシビを会場に配りました。



なまみの学びは地域にある

「学びたいなら大学を飛び出そう。そして、地域にいるなまみの人と触れ合おう」と小松理度さん。ワークショップに駆けつけてくれたのは、高島で働き暮らすみなさん。参加者の学生や社会人とともにアイデアを考えていきます。

8/23-24

キックオフ集合ゼミ @ラポール京都(京都市)

教室は間違えるところ

「教室は間違えるところなんですね。人は間違えながら正しい方向に進んでいきます。「まちガイ主義」でいきましょう。ゼミ生たちの緊張を和らげたのは、講師の川中大輔さんの言葉でした。「はじめの一步は、言葉を声にすること。スラスラじゃなくていい、あいまいな言葉でも出していきましょう」続いて9月のフィールドワークに向けて、各ゼミのプロジェクトを話し合っていきます。



ローカルの視点

影山裕樹 編集者/千十一編集室 代表

1 情報ではなく、関係を編集する

「ローカルメディアは、これまで出会うことのなかった人同士が集まるきっかけをつくります」

2 異なるコミュニティをつなぐ

「ほんとうのコミュニケーションは、同質ではなく異質のコミュニティをつなぐことから始まります」

3 ローカルメディアは、人を移動させる

「ここでしか買えない本を求めて、人が旅をする。ローカルメディアは、ビジネスのツールとしても使えます」

どうする？ 広域ゼミ

「高島のキャッチコピーは？」、「変！を大切に」影山さんからアドバイスを受け、プロジェクトに取り組むゼミ生たち。



中間発表

3日目には、各ゼミが中間発表を行いました。会場には10代20代も多く見られ、地元高島をテーマに卒業論文を書く大学生や中高生の姿も。



LOCAL BBQ

1日目の晩ごはんは、TAKASHIMA BASEでBBQ。地域福祉を支える社会福祉法人や社会福祉協議会のみならず、市役所職員や中高生も集まりました。Local Food Cafeの加藤さんの料理とともに、高島の「とんちやん焼き」や地酒を味わい、大盛り上がりの夜でした。



10/7

“たかしまデザイン会議”

TAKASHIMA BASE ゼミ

毎週足しげくTAKASHIMA BASEへ通いつめ、間違いをおそれることなく、試行錯誤を楽しみました。まちづくり活動家の西本千尋さんをゲストに迎えた「たかしまデザイン会議 DAY.3」では、おにぎりを提供し、会場に笑顔が溢れました。



10/12

“Re SHIMIZU-URA PROJECT”

椋川ゼミ

和歌山県海南市にある谷戸の集落、冷水浦。10軒以上の空き家を利活用して「チャイとコーヒーとクラフトビール」などが営まれています。あらかじめゴールを決めていないプロジェクトに取り組む大工の伊藤智寿さんを訪ねました。



10/24

“清風荘の秋祭り”

ゆたか会ゼミ

ゆたか会の特別養護老人ホーム「清風荘」で行われる秋祭り。施設で暮らす人と働く人の新しい関係性が育まれる一日に、ゼミ生が参加。法被を着て、みんなとともにこの場を楽しみ、味わい、過ごしました。



10/27

“大溝まちづくりマルシェ”

広域ゼミ

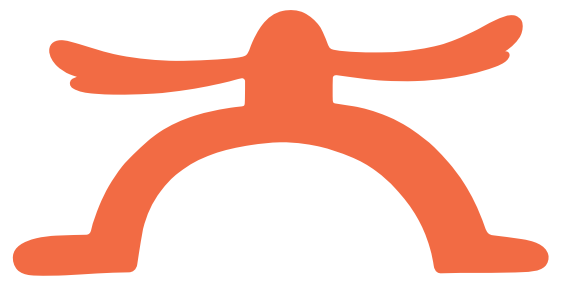
文化的景観の広がる旧大溝地域。このまちのみなさんが営むマルシェへ。お寺の境内で抹茶とてっち羊羹を味わい、江州音頭と高島おどりで盛り上がる。年に一度の場を楽しみながら、出会った人たちにインタビューを重ねていきます。



フィールドワークから 公開プレゼンまでの 各ゼミの活動

9/21-23

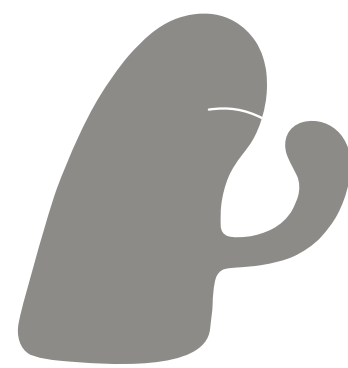
フィールドワーク @高島市内各所



フィールドで集める、チームで煮つめる

プロジェクトを料理にたとえるなら、フィールドワークは素材集め。精肉店で、揚げたてのハムカツをいただきながらまちに必要な居場所を聞いてみる。図書館に行って、郷土資料を集めてみる。小川の生きものを調べて、地域の自然資源に目を凝らしてみる。施設を訪ね、そこで暮らす人の日常に入らせてもらう。そうして集めた素材を机に広げて「どういう視点で、なにを大切に調理していこう?」。既知の未知化にもぶつかりながら、「生煮えのアイデア」をチームでグツグツ煮つめていきます。





11/3

公開プレゼン

@ 今津東コミュニティセンター (高島市)

高島のゆたかをカタチにする

公開プレゼンの会場には、100人を超える人が集まりました。TAKASHIMA BASEに集う中高生、フィールドとなった障害者支援施設「清湖園」に関わる人、椋川で働き暮らす人。そして県内、日本各地から駆けつけた学生や社会人も。立場、肩書き、年齢を越えて、みんな横並びでゼミ生の発表を聞きます。発表を通じて印象に残ったのは、3ヶ月間をかけて考えたプロジェクトを楽しそうに話すゼミ生の姿でした。「まちをゆたかにするアイデアをカタチにする」ことは、きっと大変。だけれども、楽しそうです。



高島のひと

法人職員として伴走した社会福祉法人ゆたか会の2人は、このプログラムをどう感じたのでしょうか。



葛川愛未さん 社会福祉法人ゆたか会 フードサービス

学びの場って学校だけじゃないんだ。いろいろあるんだな。あとは考えすぎずに行動することが大事。だからまずは考えを記録して振り返って気づくことからしていきたい。やりたいことはあっても時間がない、人がいない、余裕がない。「ないないづくし」のなかで、やらない理由を考えがち。ゼミ生から伝わってくるのは「まずやってみよう」「できる方法を探そう」という熱。みんなと過ごすなかで「やってみようかな」という自分があります。



内藤佑介さん 社会福祉法人ゆたか会 障害者支援施設 清湖園

自分の職場である清湖園について「半分仕事、半分遊び」で関われるのは新鮮で楽しかったです。晩ごはんをすませたゼミ生たちが「もうひと頑張りしよう」って、プロジェクトを話し合う夜8時。仕事感覚だと残業だけど、遊び感覚というか。気づくと一緒に机を囲んでいました。

高島のまちをゆたかにするアイデアのカタチ

4チーム21人のゼミ生たちが取り組んだプロジェクトを紹介します。

椋川ゼミ

TAKASHIMA BASEゼミ

ゆたか会ゼミ

広域ゼミ

プロジェクト

人口19人の集落、今津町椋川。その地に育った若者とともに、高齢化率75%の地域をおもしろがりながら、未来を描こうと奮闘します。

メンバー

是永弥里、田淵伸、長谷川乃香、松嶋祐希、三浦妃加利、安嶋泉

フィールドワーク

かつては、滋賀県内屈指の木炭産地だった椋川。ここですいすい泳ぐ魚を眺め、湧水を飲み、目で、口で、全身で、地域の輪郭を感じ取るゼミ生たち。この地へ移住し、2004年から「手づくり収穫祭 おっさん椋川」を行うのが是永さん一家。「わら細工体験などを通じて、訪れた人と村人が関わり合い、ともに元気になり、年々小さくなる椋川を続ける道を探りたい」。お昼ごはんは、近所のまさごさん、みちごさんと。お赤飯、豆ご飯、みょうがの漬物、揚げたての天ぷら、どれも最高！「椋川もう消滅するわ」と笑う2人の表情に「ここが好き」の気持ちを受け取る時間でした。



アイデアのカタチ

プロジェクトむく

椋川在住のゼミ生・是永弥里さんの「ここで暮らしたいけれど『稼げなくて不便』というのさして、選択肢から外されてしまうのが悔しい」という想いが原動力のプロジェクトです。ふくしデザインゼミLOCALで出会った仲間たちと企画するのは「おばあちゃん家の泊まれる定食屋さん」。椋川の人々が毎日立ち寄りごはんを食べながら話せる場であり、訪れる人がゆっくり椋川と出会える場です。すでに候補となる空き家も探しているゼミ生たち。Instagramを立ち上げ、クラウドファンディングの検討も進めています。



プロジェクト

新旭駅前にあるTAKASHIMA BASEを活用した、場づくり・コミュニティデザインに挑戦。まちの未来につながる具体的な一手とは。

メンバー

永長楓子、永長佑都、園田佑也、西岡萌桃、古武美玖

フィールドワーク

地域住民の森田さんに案内していただき、スマイルカフェ堀川、新旭子ども食堂へ。「共食」を通じたコミュニケーションの場では「一人でいられて、みんなでもいられる場がほしい」という中高生の声も。最後にゼミのコーディネーターであり、TAKASHIMA BASEを運営するぼくみんの瀬川航岸さんへインタビュー。「ここは、高島がはじまり続ける場。地域コミュニティともつながり、『高島でなにかはじめられそう』と思える場。はじまりの場はいつも混沌としていて、その“混沌”が実体化すると、まわりに飲食店や宿泊施設が生まれていくのでは、



アイデアのカタチ

おとも食堂

プロジェクト設計のベースには、次の想いがあります。「TAKASHIMA BASEで行われるイベント『未来のジャム』『たかしまデザイン会議』、そして日常の場としてひらかれる『BASE DAY』においしいごはんを添えることができれば、まちをゆたかにするコミュニケーションがより加速するのは？、10/7開催のたかしまデザイン会議でのおにぎり提供をはじめ、おとも食堂はすでに動き出しています。TAKASHIMA BASEは飲食店営業許可を取得予定ということもあり、収益化も含めた今後の展開が楽しみなプロジェクトです。



プロジェクト

社会福祉法人ゆたか会の障害者支援施設「清湖園」1階を地域にひらく。法人職員も一丸となり、まちぐるみの福祉を模索します。

メンバー

武村菜々美、七尾恵、西奥太一、菱垣連海、吉海星来

フィールドワーク

清湖園でインタビューを行うと、利用者さんからは「地域で暮らしたい」、職員さんからは「一人ひとりの利用者さんの望みを叶えたいけれど、自分たちだけでは難しい」「職員同士がざっくばらんに話し合える機会がほしい」という声が聞こえてきました。また、清湖園のある市ヶ崎地区を歩くと、地域が増えつつある一人暮らしの高齢者の姿が見えてきました。障害者福祉や高齢者福祉のサービスでは埋めきれない制度と制度のつなぎめが浮かびあがったのです。



アイデアのカタチ

ぽこ

プロジェクトのはじまりは、ゆたか会の「ふくしを地域にひらかれたものにした」という想いでした。市ヶ崎地区にはゆたか会をはじめ、いろいろな医療・福祉法人が拠点を構えています。ともに地域福祉を支える者同士として、法人の垣根を越えて集えたら。利用者や地域の人もふらっと訪れることができ、地域に日常の交流が生まれたら。そうして清湖園1階を「ぽこっとふくしをちいきにひらく」ことをめざします。また、ゼミ生たちは清湖園前のある広場を「ぽこうえん」としてひらくことも提案します。年内に看板をつくるワークショップを開催予定です。



プロジェクト

場を特定せず、鳥の目・虫の目を行き来する高島リサーチからスタート。独自の切り口から高島を捉え直すような、まちの編集を試みます。

メンバー

大友裕也、岡なごみ、長谷川尚孝、松村さくら、世継万里沙

フィールドワーク

今津図書館で郷土資料を調べたのち、近江今津駅前にあるローラン名小路商店街でインタビューするゼミ生たち。「高島にゆたかさはたくさんあるけど、気づかへんねん」という店主の声が耳に残りました。見落とされがちなゆたかさを拾い集め、写真と文章で伝えることを模索しはじめます。またローカルメディア「たかしまじかん」を運営する田中可奈子さんを訪ね「メディアとは、コミュニケーション。相手への思いやりでもあります」というメッセージを受け取りました。

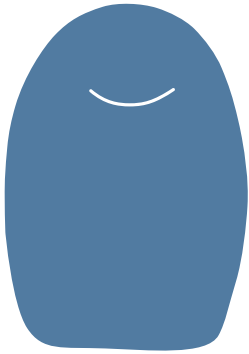


アイデアのカタチ

なんもないわ、(てん)

テーマは「高島を語る、ゆたかさに気づく」。プロジェクトの起りこは、ゼミ生・長谷部さんと高島に住む友人との「高島にはなにがある？」「なんもないわ」というやりとりでした。しかし、高島でのフィールドワークを経て、ゼミ生たちは「なんもないわ」という言葉のあとに潜むゆたかさを感じています。語りを見ることを通じて、地域にあるゆたかさを見出せないか。プロジェクトではインタビューを重ね、いろいろな人の語りを集め、サイト上で公開。書籍化や展示もめざします。「なんもない、」から「なんかある、」へ。高島からはじまり、全国のなんもないまちへの広がりも視野に入れています。





アイデアをカタチにする

ローカルの課題に、あらかじめ用意された正解はありません。答えのないことを考え続けるのは、ときにこわいものです。間違えることがあれば、ドタバタも、ヤキモキもします。それで大丈夫。きっと、手づくりの正解が見えてきます。



公開プレゼンで発表された「高島のまちをゆたかにするアイデアのカタチ」は、未来にどうつながっていくのでしょうか。各ゼミの発表後、ゲストコメンテーターによるクロsscッションが行われました。

ローカルプロジェクトは 目の前の人の幸せに取り組む

「なぜぼくらは、課題を解決しようとするのでしょうか?と、問いかけるのはソトコト編集長の指出一正さん。こう続けます。「課題の先にいる人が笑顔になるからでは? ぼくらが取り組んでいるのは、目の前の人の幸せだと思います」
幸せには、短期的な「happiness (ハピネス)」と中長期的な「well-being (ウェルビーイング)」の2種類があるといいます。「ウェルビーイングとは『ごきげんな状態』のことです。今日、みなさんはごきげんですか?会場を見渡してみましょう。荒天のなかでもこれだけの人が集まっています。発表に臨む仲間と、ともに聞いてくれる人がいます。みな

福祉と地域と若者と

大澤 健 Ken Ozawa
コーディネーター
一般社団法人ほくみん 理事



「高島だけのものとして終わらせたくない」という思いで、このプログラムに向かっています。地域において、福祉と若者はともに欠かせない存在です。そして若者は、教室外にリアルな学びの現場を求め、なまみの人間関係に飢えています。ぼくは、ふくしデザインゼミと高島にそれぞれ関わりはじめて3年を迎えます。自分自身が、福祉や地域との関わりによって目覚め、人生の思わぬ展開を身をもって経験してきた生き証人です。そうした物語が一つ、二つと増え、波紋を起こす姿も目の当たりにしてきました。だからこそ、確信します。福祉と地域と若者が関わり合うことから生まれる価値を。できる限り連鎖させていきたい。まずは、高島から。そして。



一郎さんに聞きます。「採用活動を通じて、学生の『地域づくりに関わりたい』という声を聞きます。地域づくりはわたしたちの本事業ではありませんが、1,800人が集うマルシェを年に一度開催しています。最近では、日常業務のなかで地域づくりに関われることをSAWAMURAの魅力と感じて、入社を決めてくれる方が増えてきたように思います」
澤村さんはゼミ生の発表をどのように聞いたのでしょうか。「高島市はとても広い。広すぎて、市全域を公平に守り続けるのは大変です。そうなると、椋川のような住んでいる人が少ない地域は…と淘汰される話に進むこともあります。でもその場所が、高島のよさを感じさせてくれる象徴的な場所だったりする。(なんもないわ、)だから不要ということではないな、と思い出しました。それぞれのまちに特色があるといいなと思います」
若者が校舎やオフィスを飛び出し、まちを教室にして、横並びで手を動かすなかで、ゆたかさが色濃く現れてくる。その過程で「自分はこういうことで社会に応えられるのかも」と、自分の役割を見出すこともあるのではないのでしょうか。

住民の力を信じる 福祉のゆたかさ

最後に、2023年から高島市社会福祉協議会の会長を務めている西村陽子さん。「これまでわたしたちふくしに関わる人たちは、地域のしんどいことや大変なことを一緒に支え合ってきました。でも、今福祉が心待ちにしているのは『ワクワクを一緒に作ること』。もっと楽しんでええんやろ!」と切り出します。
26年にわたって保健師として活動してきた西村さんが、地域で活動する専門職として大切にしていることは? 「住民の力を信じることです。住民の主体性こそ地域の主役です。専門職が地域課題をぜんぶ引き受けるのは、ほんとうの支援ではないと思います。住民の力ってすごいんですよ...」
住民の力をカタチにしているプロジェクトが、2019年にはじまった「たかしま流見守りネットワーク活動」です。今では市内202地区の

2つの「開かれ」の探索／構想

川中 大輔 Daisuke Kawanaka
講師
ファシリテーター／龍谷大学社会学部 准教授



うち94地区で行われており、高島になくてはならない暮らしのインフラに育ちました。プロジェクトをカタチにする上で大切なことがあります。「『ちゃんと学校で学んでいないから』『ちゃんと資格を取得していないから』『専門外だから』これ以上行きません。じゃなくて。わたしが必要やと思ったら行くんです」
ローカルの課題に取り組むとき、あらかじめ用意された正解はありません。自分の専門性にとらわれることなく、自分たちで正解をつくります。大変です。間違えることもあります。ドタバタします。ヤキモキもします。それで大丈夫。その先に未知のゆたかさが待っています。目の前の人と出会い、話し、読み、食べ、心を揺らし、手を動かしながら、まちをゆたかにするアイデアはカタチになっていきます。



ゲスト紹介

指出一正 ソトコト 編集長

1969年群馬県生まれ。上智大学法学部卒。雑誌「Outdoor」や「Rod and Reel」を経て、2011年から未来をつくるSDGsマガジン「ソトコト」の編集長をつとめる。鳥根県「しまコアカデミー」など各地のプロジェクトのほか、内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員もつとめ、国の構想や政策づくりにも広く関わる。

澤村 幸一郎 株式会社澤村 代表取締役社長

1982年高島市生まれ。大学で建築を学び、祖父が創業した建設・住宅会社の社員に25歳で就任。リーマンショックのなか、業績をV字回復。近年はリブランディングや組織づくりに力を入れ、不人気業界・地方のハードルを乗り越え、新卒年間10名採用・早期離職ゼロを実現。地域活性にも尽力し、新たな地域拠点・共創スペース「Rin Takashima」もオープン。

西村 陽子 高島市社会福祉協議会 会長

高島市生まれ。医療機関・公共機関看護課を経て、1997年から26年間、高島市役所保健師として市民の健康づくりや地域包括ケアシステムの構築に取り組む。近年は、高齢者の徘徊や孤独死、引きこもりに対応する。見守りネットワークづくりを後押し。多職種連携、在宅医療の充実、看取り支援の啓発に尽力してきた。2023年、第51回医療功労賞近畿厚生局長賞受賞。

今しか経験できないぞ!!

安嶋 泉 Izumi Yasujima
椋川ゼミ
大学生(福祉専攻)



自分のカードも出す

園田 佑也 Yuya Sonoda
TAKASHIMA BASEゼミ
社会人(デザイン会社勤務)



はじまりの、はじまり

瀬川 航岸 Koki Segawa
コーディネーター
一般社団法人ほくみん



プロジェクトの続け方

影山 裕樹 Yuki Kageyama
講師
編集者／千十ー編集室 代表



「就職決まってないし、卒論提出あるし、車の合宿免許も行くし、演劇サークルの公演も控えているし、国試もあるよね」という大学4年で「今しか経験できないぞ!!」と参加を決めました。福祉を学んできたわたしはまわりに合わせて就職活動をはじめ、新卒では「大きいところに行きたい!」と頑張るものうまいかず、「正解の生き方」のようなものに苦しさを感じていました。自分とは全然別の生き方をしてきた人たちと会いたい。夜遅くまで起きて、いっぱい移動して、体力的には疲れているはずなのに、なぜかすぐ元気で、椋川に行くたびに「生きてるなあ」って。人生狂わされたかも!? ふくしデザインゼミLOCAL。

「アイデアをカタチにする」のはすごく難しかった。フィールドワーク2日目の夜にメンバーから言われたことが忘れられない。「わたしたちに気を遣ってません? 素直に考えや気持ち共有してもらった方が助かります。はっとした。チームでもゼミ全体でも最年長のぼくは、どこか気を遣っていた。ああ、チームを停滞させる行動だったんだ。メンバーは5人。5分の4のカードしか場に出ていない状況だったかもしれない。ここには、元々もっている力を発揮するために参加したんじゃないはず。違和感に向き合うためにきた。講師の川中さんの言葉が響いた。「教室は間違えるところですから、だから大いに間違えてたくさん学んでください」

ぼくにとってのふくしデザインゼミLOCALは、居合わせた人たちの創造力が引き出され、対話と協働が生まれる舞台をつくるチャレンジでした。TAKASHIMA BASEゼミと椋川ゼミ、2つのゼミのコーディネーターとしてがむしゃらに走った3ヶ月間。あるときはレンタカーを使って視察に行き、またあるときはカラオケボックスで朝まで語り合い、ゼミ生たちはプログラムを越えた仲間になっていきました。自分を揺るがし、一人では想像もできなかったところに連れ出すような他者やローカルとの出会いに、「人生狂わされた〜」と笑い合って終わりました。でも、これははじまりのはじまり。高島の地に足を付けて、次の一步を踏み出します!

どうだった? ふくしデザインゼミ LOCAL

卒業までのカウントダウン

是永 弥里 Misato Korenaga
椋川ゼミ
大学生(国際関係専攻)



デザインでは誰も救えない?

七尾 恵 Megumi Nanao
ゆたか金ゼミ
社会人(デザイン会社勤務)



「まち」で考える

安澤 優那 Yuna Anzawa
クリエイティブアシスタント
designと



「ふくしデザイン」という考え方

田中 悠介 Yusuke Tanaka
講師
デザイナー／designと 代表



2年ぶりに下宿先の京都から帰ると、椋川は人口19人になっていた。「ものけ姫に出るぞそう!」と小学生のころ言っていた空き家の屋根は半分陥没。そして、近所の桜の木のおばあちゃんももう隣にいない。それでも未だそこにある自然はやっぱりきれいだと思う。帰ってきて、何かやりたいけどこわかった。やらざるをえなくなるし、期待もかけられるし、自分だけではできないし。足踏みをして、4年生、卒業までのカウントダウン。だけどころいろいろな背景、好き、得意、苦手を持つメンバー一人ひとりと向き合いながら、声を聴き合いながら、恐れよりも「やりたい」が大きくなっていった。公開プレゼンで100人を前に発表して「やるぞ!」となっている。

「色や形を整えて美しくすることだけがデザインではない。本質を見極めて、最も適した方法で物事を良い方法に向かわせることがデザインだ」と、美大や職場で耳にタコができるほど聞いた言葉たち。分かった気になっていたその言葉たちを、単なる知識としてだけでなく、経験として理解できたふくしデザインゼミLOCALの3ヶ月間。自分たちが見て聞いて感じて…。そこから考え尽くしたものをカタチにすることで、半径1m程の距離にいる人たちの数秒・数分・数時間をほんの少し良くできるかもしれない。今までよりも少し広くなった視界と、ずっしりとしたこの経験を残さず伝えて、また少しずつ、デザイナーとして歩き出せそうな気がする。

自分たちの住むまちと、高島。それぞれを行き来することで、価値が相対化され、あらためて「まちのゆたかさ」とはなんだろうと考える。「まちをゆたかにするアイデア」を考えるなかで、まず自分たちのものの捉え方が揺らいでいく、そんなゼミ生たちの様子が印象的でした。また、ふくしデザインゼミLOCALの学びの単位はまさに「まち」。大学では福祉、デザイン、建築など、学問の領域が分かれています。まちはそれらさまざまな領域が絡み合っていて構成されています。だからこそある領域に囚われて思考するだけではなく、まちにこんなものがあったら素敵、行きたくなるといった生活者の視点を想像することが大切ないように感じました。

プロジェクトの意義

「ふくしデザインゼミ」の「ふくしデザイン」とは、「ふくしデザイン」でも「ふくしとデザイン」でもなく、「ふくしデザイン」という新しい概念として捉えるのがいいのでは、と最近考えています。ふくし的な向き合い方、考え方を意識すればするほど、デザインが単なるアウトプットの手段になってしまう。「ふくし」と「デザイン」をわければわかるほど本質と離れていくのでは? 逆に、「ふくし」に「デザイン」が入り込む、あるいは「デザイン」に「ふくし」が入り込むというように、さまざまな分野・領域で、それぞれの考え方が越境し影響し合う先に、「ローカル」を含め、現代のさまざまな複雑化した課題や問題を解くヒントが隠されているような気がしています。